



〒 242-0007 大和中央林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL <http://edventure.jp/>

「歴史」を考えるー今もまさに現在進行形の歴史のなかにいるー

不勉強なもので、児童文学『ベルリン3部作』ー『ベルリン1919 赤い水兵』『ベルリン1933 壁を背にして』『ベルリン1945 はじめての春』 クラウス コルドン作 岩波少年文庫ーのことを新聞記事で見かけて初めて知り、早速買って読んでいます。

ベルリンの最も貧しい地区であるアッカー通りの貧しいアパートに肩を寄せ合って暮らすゲーブハルト一家。その長男ヘレが物語の主人公。庶民の生活と人々の交流、そして主人公の目線から大きな社会の動きが語られます。「1919 赤い水兵」では、戦争で片腕をなくした父親の帰宅から物語は始まり、水兵たちのストライキをきっかけとして、平和と自由を求める市民の大きなデモにまで発展し、ついにはドイツ帝国が倒れワイマール憲法が制定された十一月革命のベルリンの様子が描かれます。

「1933 壁を背にして」では、ヘレの弟ハンスが15歳の視点から、ナチスの動きに飲み込まれていく人々の様子を、そして「1945 はじめての春」では、ヘレの娘、12歳の少女エンネが主人公となり、破壊されたベルリンに空爆が続く中、疎開もできずに生活する一家の姿と、敗戦の混乱が語られます。

まさしく、戦争を軸としたドイツ社会の激しい動きに翻弄される、貧しい労働者階級の様子が生き生きと描き出されている児童文学です。



クラウス・コルドン作 ベルリン3部作

出典 <https://tanemaki.iwanami.co.jp/posts/3095>

この三部作を読みながら考えたことがあります。

一つ目は、「歴史の事実を決めるのは誰か」ということです。

戦争という歴史に関して、今日本では多くの事実が書き換えられ始めています。最近でも、「従軍慰安婦」を、「あれは商売目的で自発的に行った行為であり、従軍というあたかも軍部が主導したような名称は妥当ではない・・・」とかなんとかいう理由で、高校の教科書から「従軍」という言葉を消させることを内閣が決定し、すべての教科書会社から従ったと伝えられました。「従軍」かどうかの事実是谁が決定するものなのでしょうか。内閣でないことだけは確かです。では学者でしょうか。学者は当時の事実を調べ、学問の知見として判断を下します。そしてその基礎的資料となるのが、そのときその場に生きた人々の声であり経験ではないでしょうか。つまり、歴史の事実、それを体験した庶民が決めることなのです。「従軍」だったのか、そうでないのかは、ひょっとしたら強制的にその場に居させられた人々が一番わかっているはずで、決して、防衛予算を際限なく増やし続けている為政者たちではないはずで。

歴史の事実を決めるのは、その時代を生きた庶民だ・・・と考えるなら、教育現場で子どもたちに伝えなければならないのは、まさしく歴史を体験した先人たちの声なのではないか、とたくましく生きるゲーブハルト家の姿から考えさせられました。

でも最近、とても怖く思うのが、こうした歴史の書き換えが、為政者の手によるものだけでなく、身近な圧力によって行われていることが多くあることです。

大手予備校である駿台予備校の、日本史テキストの、竹島や南京事件をめぐる記述に対して、記述に批判的なツイッターが多く確認できたことから、記述の一部を削除したことが、最近報道されました(朝日新聞)。自民党の国会議員に事務所からの問い合わせもあったとのこと。日本史のテキストは過去の大学入試を参考に、駿台予備校が自主的に作っているもので、なんら規制がかけられる対象ではないそうです。しかし、「竹島の記述に関して、日本政府の公式見解とは違う」とか、「南京事件の犠牲者数が多いの

ではないか」と言った内容で、正直圧力が加かったようです。この件について、前教育学会会長の広田照幸教授(日本大学)は、「予備校は小中高校や大学など学校教育法が定める『学校』には含まれない。にもかかわらず駿台側が記述を削除したのは、ネット上での攻撃・批判を受けた過剰な同調といえる。また、国会議員の事務所からの電話が無形の圧力になった可能性もある。公教育の外でも今回のように同調が広がれば、表現の自由や思想信条の自由が脅かされることになり、大きな問題だ。」とコメントされています。

この報道に触れて、歴史の事実を都合良くねじ曲げていくのは為政者だけではなく、もっと大きな「同調圧力」の装置があらゆるところで働いているのだと不気味に感じました。

まさしく、『ベルリン1933』のハンスが見ている社会状況と同じです。歴史の事実を決めるのはその歴史に同席した庶民です。しかしまた、庶民はその歴史の事実を伝え合い、ねじ曲げられないように守っていかなければならないのだとも痛感しました。

二つ目は、町田で起きた悲しい事件に関してです。東京都町田市立小学校の6年生だった女の子が昨年11月、同級生からいじめを受けていたと訴える遺書を残して自殺したということが、母親の訴えでわかりました。この事件の裏には、多くの考えなければならない課題が隠れているのだと思うのですが、報道では、いじめの書き込みに学校が配布した一人一台端末が使用されたことが、そのニュースの中心になっています。確かに、アカウントもパスワードもほぼみんな一緒に、お互いの個人情報を守ることもできないし、先生方も、子どもたちが様々に端末を利用してきてしまうところまで認識が追いついていなかったのかもしれない。

でも、私がとって違和感を感じるのは、一人のまだ小学生の少女が自殺したのに、こぞってマスコミが「端末の使い方・管理」しか取り上げていないことです。だって、小学生の自殺自体が正面から問題にしなければいけない、あってはならないことだと思うからです。

このコロナ禍にあって、若者、特に高校生、しかも女子高生の自死が増加していると伝えられています。高校生が自殺を考えなければならない世の中って、何なんだろうと思っていたら、今度は小学生です。みんな、自死の前に少しでも相談したり、気持ちを伝えることのできる相手はいなかったのでしょうか。町田の小学生はいじめられていることも先生に伝え、先生は解決したものと思っていたと発表されました。でも、本当にこの子の命を助けてあげることができなかったのでしょうか。

『ベルリン3部作』の最後の主人公は、12歳の少女エンネです。12歳と言えば小6から中1、町田の亡くなった少女と同じ年齢です。エンネが同じクラスであったら、今の子どもたちの世界をどのように感じ取り、後世の人たちに伝えようとするのでしょうか。いじめに遭いながらも相談する相手もないし、先生も取り手とはなってくれなかった。こんな小学生たちの人間関係をどのように描くのでしょうか。

これも歴史です。私たちが無視することのできない、現在進行形の歴史なのです。その主人公である私たち一人ひとりが、他者とのつながりをもう少し強いものにしたり、他人の心の今よりも少し深いところまで、共感したり、受容したりする力を自分自身で獲得していくことが必要な気がするのです。やはり私たちは、その少女を守れる力を持たなくてはなりません。

一人の少女の死を知って、問題にすることが「端末の使い方」では、あまりにも悲しい世の中ではないでしょうか。

『ベルリン3部作』では、登場するたくさんの人々、一人ひとりが、それぞれの重みを持って「生きて」います。その一人ひとりの存在感が、なぜか現在の私たち(社会)の有り様を問い返してくれているように思うのです。機会があれば、是非ご一読を…!

これからのEd. ベンチャーの学習会

理論学習会 (Zoom)

- 10月 6日(水) 19:00~21:00 座談会「今の学校 どうなってるの?」
- 11月10日(水) 19:00~21:00 講演「教育と福祉のはざままで~垣根を越えた連携を目指して~」
講師: 大和市社会福祉協議会

授業研究会 (Zoom)

- 10月4日(月) 20:00~21:45 授業実践報告会 小学校教諭

外国人の子ども支援のための学習会 (Zoom)

- 事例研究会 10月27日(水) 19:00~

インクルーシブ学習会 (Zoom)

- 11月17日(水) 読書会: 西郷孝彦氏『校則なくした中学校たったひとつの校長ルール』



【理事の一言】コロナ下、多くの学習会や研究会がオンラインで開催されている。会場への往復の必要がなく、時間になったらコンピュータの前に座れば参加できる。とても便利でありがたいシステムだが、参加者の表情を読み取り、会場の雰囲気を感じ取ることが難しい。授業のオンライン化の準備が進んでいるが、子どもたちの「分からない」が拾い上げられないことがないように願っている。(SH)